

2 高知平野の古式土師器Ⅰ・Ⅱ期について

出原 恵三

高知平野における古式土師器の編年的研究は、岡本健児氏が先鞭をつけられてきたが⁽¹⁾、最古段階のひびのきⅢ式⁽²⁾（ここで言うⅠ期）を除くと良好な一括資料に恵まれず、弥生土器編年に比べると遅滞した状況がしばらく続いていた。しかしながら90年代以降、発掘件数の増加と共に十分とは言えないまでも該期の資料が増加しつつある。そのような中で筆者は、高知平野の古式土師器について1990年に4期区分（Ⅰ期～Ⅳ期）の見通しを立て⁽³⁾、ついで1993年に新資料をもとに4期区分の内容の充実を図った⁽⁴⁾。また廣田佳久氏は南四国を対象とした研究成果を提示している⁽⁵⁾。廣田氏の研究も4期区分を採用しており、個々の資料の位置付けについては見解の一致を見ないが、時期区分については現状においては概ね4期区分が妥当であろう。

今次調査において、Ⅱ区の竪穴住居址群から古式土師器Ⅰ・Ⅱ期の良好な資料を得ることができた。ここではこれらの新資料をもとに、これまでの研究の充実を図りたい。特に従来の編年の2段階（Ⅱ期）については、岡本氏の提唱された馬場末式土器を当てていたが、当型式は遺構出土の一括資料ではなく、廣田氏も指摘するように若干の時間幅が存在するものと考えられる。今次調査のⅡ区ST12からは、Ⅱ期に比定すべき良好な一括資料を得ることができた⁽⁶⁾。またその他の竪穴住居址や土坑からもⅠ期に関する良好な資料が数多く出土している。これらの新資料は、従来の編年観を大枠において変更するものではないが、若干の修正や新たな課題を生ずるに至っている。これらの新知見を加味して、改めて高知平野の古式土師器について若干の考察を行なうものである。

（1） 古式土師器Ⅰ期

質・量共に最も充実した資料を有する時期であり、今次調査で検出した竪穴住居址の大半もⅠ期に属するものである。Ⅰ期を構成する器種は、壺・甕・鉢・高杯・支脚・器台・小型3種であるが、今次調査においては、小型三種を除くすべての器種が出土している。高知平野における弥生土器から古式土師器への変化は極めて漸進的な変化を辿っており弥生土器の延長線上に位置つけることができる⁽⁷⁾。弥生時代後期の最終末の後期Ⅲ－3期から古式土師器Ⅰ期への製作手法上の変化としては、丸底・尖底が多くなる点やハケ調整が少なくなることなどをあげることができるが、相対的な変化であり技術上の太きな画期は見出し難い。しかしながら、土器組成の変化と搬入土器の顕在化と言う点において違いを見出すことができる。今次調査で出土した土器群もこの域を大枠において逸脱ではないが、あらたに得られた知見について述べることにする。

先ず、これまでⅠ期の指標の一つとして装飾壺の消失を挙げていたが、今次調査の竪穴住居ST13・14で少数例ながら認められた。このことは前回も触れたように両者の連続性の強さを示しているものと言えよう。次いで今次調査で特徴的であったのは、小型の鉢を挙げることができる。この種の鉢は、弥生後期Ⅲ期以来増加の一途を続け、甕と共に器種組成の8割り近くを占めているが、今回ST13・14などで出土したタイプは、これまで知られていた丸底・小皿状のものとは異なり、平底で器高指数の高い椀状のものが多い。このタイプは前回も指摘したように、古式土師器Ⅱ・Ⅲ期の鉢を指向した新しい要素である。器種組成上の特徴としては、高杯の増加を挙げるこ

とができる。高知平野においては弥生後期Ⅲ期をとうして、高杯は極めて僅少な器種となっており、当遺跡においても後期Ⅲ－Ⅲ期の住居址出土の高杯は平均すると1.8%であったが、古式土師器Ⅰ期の平均は3.0%に増加している。またこの高杯は、杯底部から稜線を有して立ち上がる深い杯部を持つものでこれまでには認められなかった新しいタイプである。西分増井遺跡のST 8からその存在は明らかとなっていたが、今次ST13よりまとまった資料（167～172）を得ることができた。

古式土師器Ⅰ期の特徴の一つに搬入土器を挙げることができることについてはすでに触れたが、今次調査においても数多く出土している。壺・甕・高杯が認められ、甕が最も多い。出土産地と器種について見ると、壺・高杯は東阿波型土器、甕は吉備型甕・庄内甕・東阿波型が見られる。混入や胴部細片も含めれば152点に及び、搬入土器の内訳は東阿波型土器が88点、吉備型甕が47点、庄内式土器が8点、産地不明が9点である⁽⁸⁾。Ⅰ期の住居址からは、例外なく一地域あるは複数地域の土器が出土している。Ⅰ期における搬入品の出土例を周辺地域に求めれば、春野町の西分増井遺跡ST 8⁽³⁾、南国市の岩村遺跡ST 1⁽⁹⁾、同五軒屋敷遺跡ST 2⁽¹⁰⁾、土佐山田町のひびのき遺跡A地区竪穴住居⁽²⁾などを挙げることができる。これらの諸遺跡からの搬入土器の産地も上記の3地域からのものである。器種は甕が多いが、岩村遺跡からは吉備型の鉢が出土している。次に搬入品の時期であるが、東阿波型土器の甕・壺については菅原康夫氏の黒谷川Ⅲ式⁽¹¹⁾に、吉備型甕は高橋護氏のX－e期⁽¹²⁾に平行関係を求めることができるものである。庄内式土器との関係については、八尾市萱振遺跡SE03⁽¹³⁾の一括資料のなかに見出すことができる。すなわち庄内式土器の後半、布留式土器との交替期に該当させることができよう。すでに周知のように、これら三地域の当該型式は、萱振遺跡SE03から在地のいわゆる伝統的Ⅴ様式土器とともに出土していることから、併行関係には確信が持てる。

したがってこのことは、高知平野においては庄内式と布留式の交替期に古式土師器としての成立を認めることができるのであり、庄内式土器の大部分の段階は弥生後期Ⅲ期の中にあると見てよい。

（２）古式土師器Ⅱ期

Ⅱ期は概ね岡本氏の馬場末式土器に該当させることができるが、先述のように一括性に欠けるきらいがある。岡本氏は当該期の指標として叩き手法の衰退を挙げているが、ST12出土の土器こそ最もⅡ期にふさわしい資料とすることができる。前回の報告ではⅠ期の中に含めていたが、ここで改めて古式土師器Ⅱ期として位置付けたい。壺・甕・鉢・高杯から成っているが、高杯には好例を欠いている。搬入土器は見られない。壺はラッパ状に外反する二重口縁を有するもの（112）と口縁直立の二重口縁壺（113）が見られる。前者はⅠ期に搬入土器としてのみ存在していたタイプであり、Ⅱ期に至って在地で作られ始めたことを示している。甕は伝統的な長胴砲弾タイプから球形に変化し、叩き目は残るものの大部分をナデとハケ調整によって消している。胎土も弥生後期Ⅲ期～古式土師器Ⅰ期の赤褐色風のものから暗黄褐色風のものに変化しており、器壁も心持ち薄くなるようである（114～116）。116には内面ヘラ削りが見られる。これまで在地土器においては、内面ヘラ削り手法は例外的な存在であったが、Ⅱ期以降Ⅲ・Ⅳ期をとうしてかなり一般化する。鉢は、伝統的な皿状のもの（123）とⅠ期のST13・14などで顕在化した椀タイプ（188～122）が見られ

るが、後者が多くを占めている。

I期には多くの搬入土器が見られたにも関わらず、在地の土器生産にはほとんど影響を与えることはなかった。II期に至って初めて球形化や内面ヘラ削り、叩き目の消去など技術上の変化が窺える。

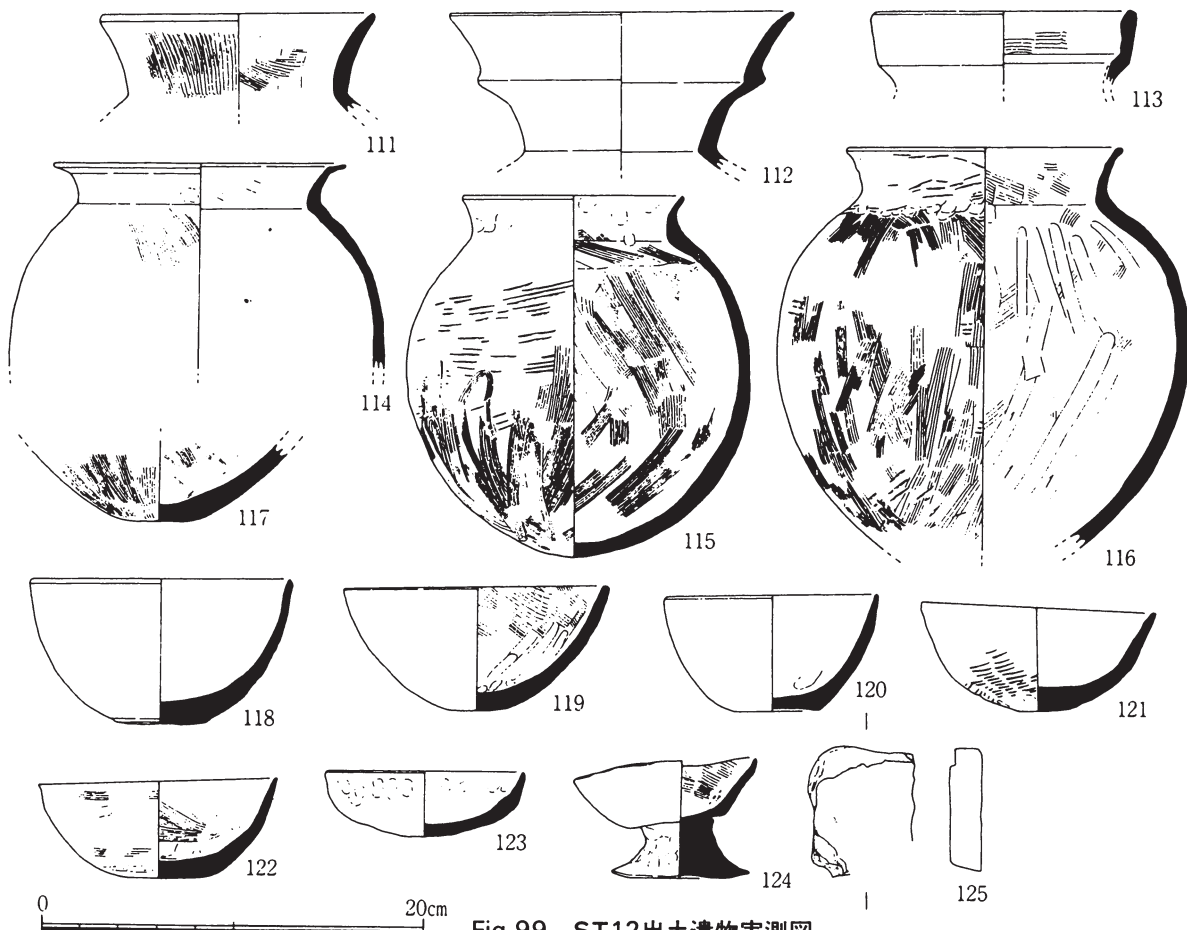


Fig.99 ST12出土遺物実測図
(『小龍遺跡II』1996年Fig.21より転載)

(3) まとめ

前方後円墳出現前夜の中部瀬戸内や徳島平野、河内平野には、弥生土器を払拭した新しい手法による土器群が登場する。吉備型甕、B類土器、東阿波型土器、庄内式土器と呼ばれているものである。これらの土器は強い個性を有しながらも、それぞれの型式に見られる強固な規格性、統一された胎土などに見られるように、各地域で形成された専業集団の手による製品であるという点において歴史的共通性を有している⁽⁷⁾。これらの土器に示された個性は、地域の独自性を表現したものであるが、それを貫く普遍性については、吉備中南部で醸成された祭祀型態をはじめとした強いインパクトのもとに現象したことが考えられる。新たな生産関係の中で生じたこれらの土器は、もう一つの重要な性格が付託されている。それは遠隔地への移動である。この土器の生産と流通における変革の中に、前方後円墳の造営を可能にする構造的基盤の整備を見出すことができる。

すでに触れたように高知平野の古式土師器I期は、搬入品を除くと弥生後期III-3期との間に大

きな違いを見出すことはできない、弥生土器の延長上に位置付けられるものである。これは上述の新しい土器群を誕生させた地域とは異なり、当該期においても弥生時代社会を踏襲した諸関係が継続していたことを意味する。上述の搬入土器に数多く接しながらも、なんら技術革新は生じていない。この現象は、歴史的段階はことなるが、恰も周辺地域の縄紋晩期土器の中に遠賀川式土器が入って行く現象と類似している。このことは、最終末の青銅祭器を多く受入れた地域であり、前期古墳が見られない地域であることと有機的な関連があるものと考えられる⁷⁾。

II期の基準資料としてST12出土の土器を提示したが、II期に至ってはじめて手法・形態ともに弥生時代的なものを払拭し、古式土師器としての様相を整える。布留式土器の比較的古相の段階と併行関係にあると思われるが、今後資料の増加を待って周辺地域との併行関係や高知平野の特徴の抽出に努めなければならない。I期に多かった搬入土器は見られず、以後III・IV期においても同様である。古墳時代創出の激動期が去り、再び地域社会の均衡が保たれ始めたことを意味しているのかも知れない。しかしながらこの時期以降、高知平野においては遺跡数は激減し、弥生時代に見られた盛況は絶えて認めることはできない。

(註)

- 1) 岡本健児「四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集 下1982年
- 2) 岡本健児・廣田典夫『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1977年
- 3) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会 1990年
- 4) 出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会 1993年
- 5) 廣田佳久「周辺地域における土師器の様相」『研究紀要』第1号 高知文化財団埋蔵文化財センター 1994年
- 6) 出原恵三・藤方正治・泉 幸代・浜田恵子『小籠遺跡 II』(高知文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 7) 出原恵三「弥生から古墳へー前期古墳空白地域の動向ー」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会 1998年
- 8) 泉 幸代「小籠遺跡出土の搬入品について」『小籠遺跡 II』(高知文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 9) 出原恵三・武市義浩『岩村遺跡群II』高知県南国市教育委員会 1997年
- 10) 角谷和男『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- 11) 菅原康夫『黒谷郡頭遺跡 I』徳島県教育委員会 1986年
- 12) 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』 1988年
- 13) 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要 1』 1983年